

# 読 解 作 文 7

和氣 圭子

## Reading Comprehension and Composition 7

WAKI Keiko

読解作文7の授業について報告する。2002年度1～3学期、および2003年度1学期の4学期間について概観する。

### 1. 受講者

学生数は20名前後。2002年度2学期は60%以上の出席者が9名と少なく、中国・台湾・韓国の学生のみであったが、それ以外の学期は漢字圏・非漢字圏にこれといった偏りは見られない。

2003年度1学期の学期始めに行ったアンケートを見ると、日本語で読む必要、書く必要があるものとして、以下のものが多くあげられている。

読む必要があるもの：論文(15)、授業の資料(13)

書く必要があるもの：論文(14)、レポート(17)、メール(11)

( )内は「必要がある」と答えた人数。21名中。

論文、レポートといったアカデミックな読解・文章作成能力に対するニーズが高いことがわかる。これは、大学院受験を控えた研究生や、日本語・日本文化研修生がかなりいることによるものであろう。

### 2. 授業概要

とりあげた内容は、主に3つ、1) 新聞記事の速読、2) 読解課題、3) 作文課題、である。以下それぞれについて述べる。

#### 1) 新聞記事の速読

狙い：言語学習を目的とした「解説」的な読み方から、内容指向の自然な読み方へと読み方を移行させる。短時間で多くのものを読む方法、負担にならない読み方を身につける。

教材：プリント教材。500字前後の新聞記事に、a) キーワード拾い(いつ、だれが、どこ

で、など)の問題、b) 正誤判定問題、のいずれかを数問ずつ設けた。

授業内容：学期始めに練習の目的を話した上で、読んでいる間は辞書を引かないこと（推測して読み進めること）、なるべく設けられた制限時間内で読むこと、を約束事項とした。毎回の授業で1~2本の教材を配布し、その場で読んで設問に答えるという作業を行わせた。ほぼ全員が問題を解き終えたところで答え合わせを行い、その後、音読（漢字の読みをチェックするため）、質問受付を行った。

## 2) 読解課題

狙い：文章を細かい部分まで精読する。自分で読み、できるだけ自分で問題を解決する。

教材：プリント教材。論説文、エッセイ、新聞記事、小説、まんが、など、主に生教材を元に設問を加えて教材とした。また、『日本語上級読解』（アルク）の一部も使用した。

文章の種類とそれぞれの教材の狙い、設問の内容は、およそ以下の通り。

- a) 論説文：段落構成・文と文との接続関係をつかむ。指示語の指す内容を正しく把握する。内容の要約を書く。
- b) エッセイ：慣用句などの表現や言い回しの意味を理解する。文型・慣用句・その他表現・語彙を学ぶ。
- c) 新聞記事：内容・段落構成をつかむ。社会・文化などの背景知識を使って読む。内容の要約を書く。
- d) 小説・まんが：読むことを楽しむ。言語以外の情報を読む。

授業内容：課題は宿題とし、授業前に回収・チェックする。授業ではそれを返却し、設問の答え合わせ、文章についての質問受付、質疑応答を行った。

## 3) 作文課題

目的：読んだものについての意見等を適切な表現で書く。論文・レポートで用いる典型的な表現を学ぶ。

教材：プリント教材。以下のものを元にして作成した。

- a) 新聞投書：1~2本の投書を読んで、それに対する意見文を書く。
  - b) 『大学・大学院留学生の日本語4 論文作成編』（アルク）：文型・表現の練習問題、作文課題。
  - c) 学術論文の要約・抜粋：文章の中から、上のb)で学んだ文型・表現の使われている部分を探し、実際の論文で使われていることを確認する。
- b, c) について、2003年度1学期には以下の内容を扱った。

○序論：課題の提示〈学級崩壊について〉

何が問題か、何が必要か、何について研究するかを述べる。

○定義する・分類する〈「行動パターン」について〉

講義メモから定義、分類する文章を書き起こす。

○結論の提示〈電子メールについての調査〉

調査結果をもとに結論を述べる。

授業内容：課題は宿題とし、授業前に回収・チェックする。授業ではそれを返却して以下の作業を行った。

a) 意見文について：評価観点を教師側から提示し、学習者に自分の作文の読み直しと自己評価をさせた。また、他の学習者の作文（無記名にしたもの）を渡し、簡単なコメントを書かせた。コメントは、作文を書いた本人に返るようにした。

これは、自分の書いたものを客観的に読み直すこと、説得力のある文章、独りよがりでない文章を書くことを目指して行った。

b) アカデミック・ライティングについて：設問がある課題では答え合わせをする。また、提出作文の中から訂正すべき部分、よりよい表現にできる部分、を抜き出してまとめ、どう直したらよいかを考えていった。

a, bの作業後、どちらの作文も訂正し再提出することを宿題として課した。

### 3. 授業をして気づいた点

授業終了時のアンケートをふまえ、問題点や検討課題について述べる。

#### 1) アカデミックライティングの要望の高さ

この授業は特に「アカデミックライティング」を中心としているわけではなく、各学期において、レポート・論文作成を視野に入れた作文課題は2～3回であった。終了時アンケートでは、この項目の勉強をもっとしたかった、もっと長いものを書いてみたかった、という声があがっている。

#### 2) 作文の訂正

先に述べたように、作文はすべて訂正・再提出を課している。1回目の提出作文は、誤っている部分に下線を引いて返却する。学生が自己訂正できそうな部分は下線のみ、自己訂正が難しそうな部分には適切な表現をコメントとしてつけている。学生はそれを見て、訂正の上、再提出する。

作文を訂正・再提出することについては、多くの学生が、必要である・意義がある、との感想を述べている。訂正することで自分の弱点・問題を知り、乗り越えることができると考えているようだ。一方で、自己訂正は難しすぎるのであっさり直してほしい、との声もあった。

他の学習者からコメントを得ることについては、参考になるという意見と、どこまで信頼して

いいかわからない、かえって混乱する、という意見がある。

作文訂正のためには何らかのコメントが必要だが、教師側からのコメントにしても、他学習者からのコメントにしても、「書かれた」コメントだけでは無理があるのではないだろうか。なぜそう書いたのか、何をどう直すべきか、どうしたらよくなるか、時間をとって話し合う必要があるのではと思う。読解作文のクラスということで、いろいろな課題を盛り込んでしまい、このような話し合いの時間が設けられなかったのは残念だった。

### 3) 宿題の提出方法

宿題の提出方法は、次の3つを提示した。

a. 紙で提出（手書きまたはワープロ打ち）／b. 電子メールで提出／c. web 上のフォームから提出

作文は訂正・再提出を課していること、また学習者のニーズから見てもワープロでの文書作成が必要と思われることから、メールや web での提出が多いだろうと予想していた。だが実際には、毎学期、半数ほどが手書きで提出してくる。

学生同士で作文を読み、コメントする場合などは、ワープロ打ちのほうが客観的な判断ができるであろう。教師が評価・訂正する際にも、手書き文字の影響は少なからずあると思うので、作文課題は全員にワープロ使用を義務づけたほうがよいかもしれない。

### 4) 学期末評価

学期末評価は、毎回の宿題提出（50%）・最終テスト1回（50%）によって評価している。2002年度は、課題については内容評価をせず、提出したかどうかの回数のみを成績に含めた。そのため、他授業に比べて評価基準が甘くなったのではないかという懸念があった。

2003年度1学期は、作文課題にそれぞれ評価をつけ、学期末評価ではこの作文評価も考慮に入れた。だが結果的に、提出回数のみを評価に入れた場合とほとんど違いのない成績になった。つまり、きちんと課題を提出する学生は、内容的にも優れている、という結果であった。だが、たまたまこの学期がそういう結果になったのかもしれず、この点については今後とも検討を要する。

## 4. さいごに

テストを含め10回の授業で、読解力・作文力を伸ばすというのは非常に難しい。このクラスでは、力を伸ばすためのきっかけをつかむ、つまり、弱点・問題点を知り、それにあった学習法・対処法を身につけるための材料が提示できれば、と考えていた。今後、どういった材料を、どう提示すればよいのか、さらに考えていきたい。